

教えてください、あなたのことを。①⑦

沖縄県那覇市 桜井 国俊 さん（沖縄大学教授）



Q 差し支えなければ、年齢、出身地を教えてください。

A 昨年古希（70歳）を迎えました。出身地は伊豆の熱海です。生家は相模湾を見下ろすミカン農家で、「みかんの花咲く丘」そのものの景色の中で育ちました。

Q ごみ問題に関心を持つようになったのは…？

A 東京大学で環境学を専攻し、宇井純先生に徹底的に鍛えられました。廃棄物管理で学位をとって以降、WHOやJICA、東大などで働きながら途上国の廃棄物管理の向上支援を中心に働いてきました。お手伝いをした国は60カ国を越えます。

Q 「ごみ・環境ビジョン21」に入会してくださったきっかけを教えてください。

A 国内ではながらく武蔵野市民でした。武蔵野市で1984年に稼働したクリーンセンターを巡る市民運動にかかわった皆さんと知り合うとともに、武蔵野市民であった服部美佐子さん（元ごみかん理事）から啓発をうけて入会しました。

Q 特筆すべき近況があれば、教えてください。

A 恩師の宇井純先生に強く誘われ2000年に沖縄大学に赴任したのに伴い、熱帯・亜熱帯島嶼の廃棄物管理の向上にとりわけ強い関心を持って取り組んできました。島嶼はリサイクルを進めようにもロットがまとまらず、かつ先進国リサイクル市場から遠いという大きなハンデがあります。またその経済は観光業依存の場合が多いのですが、観光客が増えれば増えるほどごみ問題が深刻になり、それが解決できなければ観光業に悪影響が生ずるという矛盾があるからです。そこで沖縄と太平洋島嶼諸国の廃棄物関係者が相互に学びあうという国際協力のプロジェクトを2000年に立ち上げました。

このプロジェクトは発展して現在J-PRISMという太平洋島嶼諸国11カ国の廃棄物管理向上支援の大型プロジェクトになり、私はこのプロジェクトの国内支援委員会の委員長を務めています。この11カ国は昨年3月にベトナムのハノイで開かれた第4回アジア3Rフォーラムに参加し、島嶼国の観点から3Rについて経験交流をしました。写真は交流セッションの司会を務める筆者（左側）とツバル国の外務大臣（右側）です。島嶼国はハンデも大きいですが、プラスチック輸入禁止やデポジット制の導入など、小さな島国であるが故に可能となる取り組みもあり、沖縄にとっても参考になることが多々あります。

Q ごみかんに期待したいこと、あるいは提案したいことをお聞かせください。

A 日本の家庭ごみは、容積では2/3、重量では1/3が容器包装ごみです。しかし容器包装リサイクル法は、リサイクルに熱心に取り組む市民と自治体に過重な負担がかかるという不条理な仕組みとなっています。またリサイクルに重点を置くあまり、容器包装を少なくする社会づくりに向かっていません。容器を製造し、使用する業界、そして分別に無関心な市民により大きな負担がかかる経済的な仕組みをつくるのが環境正義です。ごみかんにはそのための強力なアドボカシーの展開を期待します。

つなげるつながらる会員さん

桜井先生はこの3月に沖縄大学を退職されます。「これからは一市民として沖縄の米軍基地環境問題の解決を中心に市民活動を行っていくつもりです」というすばらしいメッセージをいただきました。